

★信仰の回をもちて×リリ入るべしと見る!

2008 年松原湖研修会 講演 I レジューメ

福音主義の歴史～日本プロテスタント 150 年の概観～

3124:39-38

山口 陽一

1690m

1、はじめに

4:35

207226

カトリック

福音主義

教義

日本プロテスタント宣教 150 年を迎えるにあたって日本における福音主義の歴史を概観し、今研修会のテーマである「福音主義に立つ日本同盟基督教団」について考えます。

① 概観の方法

最初の 50 年、次の 50 年、そして近々の 50 年という区切り方をしてみたいと思います。

② 福音主義 — いろいろあるところからあつた結果 古い → 新しく

佐藤敏夫「ヨーロッパ大陸の敬虔主義、アングリカン教会内の低教会派、英国の分離派とピューリタンたち、18 世紀以来の敬虔主義的・信仰復興運動的なキリスト教に対する名称」

JEI → 泉田昭氏は「信仰的自由主義に対して福音主義、エキュメニカルなグループに対して福音派という表現を使っている。つまり、聖書は誤りのない神のことばであると信じ、基本的教理を保持し、救霊と伝道に励んでいる者たちのこと」

2、プロテスタント開教 50 年

超教派はなし。ヨーロッパの各教派の伝道士が来り、

提議

1909 (明治 42) 年、開教五十周年記念祝賀会 ミュー、舟、山、と、

① 福音主義

日本基督公会「日本基督公会条例」(1874 年)は、万国福音同盟会 (The Evangelical Alliance, 1846) の信仰箇条九ヶ条を援用。第二条は以下。

「我輩ノ公会ハ宗派ニ属セズ唯主耶蘇キリストノ名ニ依テ建テル所ナレバ、単ニ聖書ヲ標準トシ、是ヲ信ジ、是ヲ勉ムル者ハ、皆キリストノ僕、我儕ノ兄弟ナレバ、会中ノ各員全世界ノ信者ヲ同視シテ一家ノ信愛ヲ尽スベシ。是故ニ此会ヲ日本国基督公会ト称ス」

この教会は 1877 年、ハイデルベルク信仰問答、ウエストミンスター大小教理問答、ドルト信仰基準を採用する日本基督一致教会となりますが、1890 年には再び簡易信条の日本基督教会となります。「新旧両約の聖書のうちに語り給ふ聖霊は宗教上のことにつき誤謬なき最上の審判者なり」

② 伝道

1889 年、大日本帝国憲法 28 条「日本臣民は安寧秩序を妨げず及び臣民たる

金庫通帳

1877 年 1877 年 1877 年

植村

3ヶ月の間 西化 バラの情勢 リバール →

脱亜入欧

キリスト教

行政の劃分等。

国体ニつキリスト教

天皇の神格化

の義務に背かざる限りに於いて信教の自由を有す。「大日本帝国は万世一系の天皇これを統治す」(第一条)、「天皇は神聖にして侵すべからず」(第三条)

教育と宗教の衝突

EDUCATION

「教育と宗教の衝突」論争においてナショナリズムと衝突より伝道を優先。

「吾等ハ各々ソノ教義ヲ發揮シ皇運ヲ扶翼シ益々国民道徳ノ振興ヲ図ランコトヲ期ス 吾等ハ当局者ガ宗教ヲ尊重シ政治宗教及教育ノ問題ヲ融和シ国運ノ伸張ニ資セラレンコトヲ望ム」(三教会同、1912年)

国已成情

日本の花よめ事件、日仏、日ロ競争

云々云々云々云々
日本で行なわれてる。

3、プロテスタント宣教 100 周年 55→175

1903

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

フランス

1959 (昭和 34) 年、NCC による宣教百年記念大会

① 協力伝道

日本の教会史では成長期。日本は順風の中で、朝鮮では逆境の中での「成長」。

② アジア太平洋戦争期 (1931~1945 年) の罪責

「教団規則」第七条「生活綱領」の「皇国ノ道ニ從ヒテ信仰ニ徹シ各其分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルベシ」は福音主義の破綻。

宣教 100 年にあたり福音派諸団体は、宣教百年記念聖書信仰運動を展開し、

1960 年には日本プロテスタント聖書信仰同盟 (JPC)、1968 年には日本福音同盟 (JEA) が創設。

宣教百周年の課題とならなかったことに教会の戦争責任 (罪責)。

NCC と経典派 20万→40万

4、日本プロテスタント宣教 150 年とその課題

危機の時代における宣教協力~宣教 150 年を迎える新しい日本と教会を拓くために

「危機の時代」における宣教協力~宣教 150 年を迎える新しい日本と教会を拓くために

くために」

① 戦時下の罪の自覚

靖国問題特別委員会が「教会と国家」委員会に。

現在のプロテスタント人口は全人口比 0.5% を悲観せず。

② 福音主義の将来

宣教 200 年の区切りは 2046 年に。

ポストモダンとグローバリズムの中で。

分離から協力へ。

中での対応

中での対応

中での対応

中での対応

中での対応

中での対応

中での対応

中での対応

中での対応

戦争責任告白

1000人を超える韓国宣教師

1000人を超える韓国宣教師

1000人を超える韓国宣教師

1000人を超える韓国宣教師

1000人を超える韓国宣教師

1000人を超える韓国宣教師

1000人を超える韓国宣教師

1000人を超える韓国宣教師

1000人を超える韓国宣教師

国民の

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

神社問題

1976年(第1回)日本伝道会議

1976年(第1回)日本伝道会議

1976年(第1回)日本伝道会議

1976年(第1回)日本伝道会議

聖戦 日本教皇

聖戦 日本教皇

聖戦 日本教皇

聖戦 日本教皇

1990年 日本人への帰還

1990年 日本人への帰還

1990年 日本人への帰還

1990年 日本人への帰還

講演Ⅱ「福音主義と現代」

遠藤勝信（小平聖書キリスト教会）

I. はじめに

・「福音主義」という在り方の見直し

- 1) アリスタ・マクグラス著『キリスト教の将来と福音主義』（1991年）：*Evangelicalism and the future of Christianity* が原題。
- 2) 20世紀後半に観られる同様の試み：C・ヘンリー、J・I・バッカー、M・エリクソン、B・ラム、D・ブロッシュ、H・オッケンガー、J・メイチェン、F・シェーファー等。日本では、宇田進『福音主義キリスト教とは何か』（1985年）がある。
- 3) 宗教改革：evangelish は、Katholish（カトリック的）に対する用語。「聖書信仰に立ち返る運動」であり、「聖書のみ」「信仰義認」「聖徒の交わり」を三大原理（P・Schaaf）とする。
- 4) 新正統主義：リベラル神学に対する新正統主義運動。当時のリベラル神学が、神学を「人間」に向かおうとしていたのに対し、バルトは「神のことば」に向かわせようとした。

II. 福音主義とは

・1846年に、ロンドンで開かれた「福音主義同盟」が示した信仰規準

- 1) 聖書論：聖書の権威と充分性
- 2) 聖書解釈における個人的判断の権利および義務
- 3) 神論：三位一体論
- 4) 人間論：全的墮落
- 5) キリスト論：神性、受肉、贖い、仲保者
- 6) 救済論：信仰義認
- 7) 聖霊論：回心と聖化
- 8) 終末論：霊魂の不滅、復活、審判
- 9) 教会論：職制、聖礼典

・D・ベピントン（1989）による、福音主義の顕著な四つの特徴

- 1) 「回心主義」
- 2) 「行動主義」
- 3) 「聖書主義」 *みことばにまづいて全き回復*
- 4) 「十字架の中心性」

・マクグラスによる、福音主義の6つの確信

- 1) 聖書の権威と充分性
- 2) 十字架の贖いの中心性
- 3) 聖霊の主権性
- 4) 個人的回心の必要性
- 5) 伝道活動の優先性
- 6) キリスト者共同体の重要性

※福音主義という在り方は、かつて宗教改革者らがスローガンとして掲げた、「聖書のみ (*sola Scriptura*)」の精神に立ち、そこに基づいて生きるという在り方の問題。そこでは、個々人に、生きた信仰求められ、教会生活、礼拝生活、そして、伝道生活において、より積極的な在り方が求められる生き方を指している。

Ⅲ. 福音主義の系譜

教会の歴史のなかで、そのようなイズムが顕著に表われたのが、17世紀のピエティズム（敬虔主義）であり、18世紀のピューリタニズム（清教徒運動）であり、19世紀のリバイバリズム（信仰復興運動）であった。

1. 敬虔主義、信仰復興運動

- ・フィリップ・ヤコブ・シュペーナーによる教会の霊的刷新と、実践的信仰の確立（『ピア・デシデリア（敬虔な願い）』1675年）
- ・家庭集会の開催、聖書のみことばの分ち合い、禁欲的でかなり厳格な信仰生活
- ・その後、欧米各地で、信仰復興運動が展開：
 - 18世紀：ウエスレー、ホイットフィールド、ジョナサン・エドワーズ
 - 19世紀：D・L・ムーディら（フレデリック・フランソンが師として仰いだ）
- ・19世紀にスウェーデンで興ったリバイバル：家庭集会、信徒伝道、裁縫会の組織

2. 啓蒙主義、モダニズムと教会の対応

17世紀後半から19世紀という時代は、啓蒙思想が時代の潮流となりつつあった時代であった。

・啓蒙思潮の7つの特徴（宇田進）

- 1) 人間理性に対する全幅の信頼。合理主義。キリスト教の超理性的要素の排除。
 - 2) 近代科学こそ、物事に対する確実な解答を与え得るという期待
 - 3) 人間中心主義的な世界観に立った歴史主義、歴史研究
 - 4) 聖書を、無条件に理性的批判の検証に委ねた。
 - 5) 寛容の態度こそ宗教上の最高の徳であるとして、相対主義を提唱
 - 6) 進歩への信頼
 - 7) 信仰と確実な認識の分離。信仰と理性を峻別する。神認識に関する不可知論的傾向。
- ・この思潮は、次第に宗教と科学を分離させ、理神論、または無神論の傾向を深めさせることになる。
 - ・この時代精神を抵抗し難いものと見て取った神学者らは、神学を、それに適応させ、適合させる道を選んだ。それが自由主義神学（当時は、新神学とも呼ばれた）神学の在り方。自律的理性に立脚し、現代に適応し得るキリスト教の、再構築の試みであった。

・ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』(1906年)

「ハンス」と親方は低い声で言った。「お前に言っとかなくちゃいけないことがある。…牧師さんは不信心な人だということを知っておかなくちゃいけないよ。お前に向かって聖書は間違ってるとか嘘だとか言うだろう。牧師さんと一緒に新約聖書を読んだりしたら、おまえ自身の信仰がなくなってしまうし、どうなるかわからない。…信心深い良心的な人たちと聖書を勉強するのと、神さまを信じていない人と読むのとはまったく別のこと」なんだ（『車輪の下』71～72頁）。

- ・「自由主義」という在り方は、本来、社会学・政治学の用語だが、それが神学に適用されたときに、「歴史的及び組織的教理体系から自由に個人の理知的判断に従って再解釈する」という意となる。歴史的、及び組織的、教理体系から自由である。当然、教会から自由であり、あらゆる既成概念から自由を得て、自律的理性の監督のもとに聖書が置かれることになる。聖書の無謬性は退けられ、神の超越性は否定され、内在的に捉えられることに。そこから提案される神学は、人間主義的であり、倫理的なものになる傾向が見られました。

シュレーゲルの日本への参上

3. 保守派の応答：根本主義運動

自由主義神学に対して危機感を募らせた保守派が、米国を中心に、根本主義（ファンダメンタリズム）の運動を展開。

・1878年にナイアガラで開かれた聖書会議の「5つの基本信条」

- 1) 聖書の靈感と権威 (Inerrancy of the Bible)
- 2) キリストの処女降誕 (The virgin birth and deity of Jesus Christ)
- 3) 代償的贖罪の教理 (The doctrine of atonement)
- 4) キリストの体の復活 (The bodily resurrection of Jesus Christ)
- 5) イエス・キリストの再臨 (The bodily second coming of Jesus Christ)

・伝道文書シリーズ「ザ・ファンダメンタルズ」の刊行 (1910～15年)

- ・当時の根本主義運動は、現代社会からの影響に対して慎重であった。特に、初期の根本主義の立場に立つ者たちの多くは、千年期前再臨説を取る者が多かったために、自由主義神学の持っていた終末論（神の国を、社会的活動を通してこの世に実現するという在り方）と対立。
- ・保守的な神学者の中には、その中道を取ろうとした者もあり、根本主義の立場に立つ者のなかに温度差が生じ、やがて、お互いに分裂へ。

4. リベラル派からの新たな流れ：新正統主義運動とポストリベラル

- ・新正統主義運動：自由主義に対する、根本主義者からの応答に、少し遅れる形で、自由主義陣営の中からも「福音主義」の運動が興る。カール・バルトによる新正統主義運動の展開である。バルトは、自由主義神学が、神学を人間の側にたぐり寄せ、神と神の啓示を内在的に捉えたことに対抗し、専ら神の超越性と恩寵を強調し、啓示を神の独占行為と位置づけた。以後、この新正統主義運動が、自由主義運動に代わって、プロテスタント教会の主流となって行く。
- ・福音派の応答：後に、旧プリンストン学派の学者たち、J・G・メイチェンやコーネリウス・ヴァンティルらによって、特に、聖書観に対する新正統主義批判が展開されてゆく。

- ・バルトにとって、無謬なる神のことは、キリストによる出来事であり、聖書は、その無謬の神のことはなるキリストを、可謬なる人間が証言したものに過ぎない考える。その可謬性を有する聖書を神のことは足らしめるものこそ信仰を通して働く聖霊のわざであると。それは、これまで保守派が保持していた客観的、静的啓示論に対する、動的啓示論の展開であった。
- ・ポスト・リベラリズムの展開：バルトの解釈学が動的啓示論にあるとするならば、ポスト・リベラルの啓示論は「開かれた啓示論」と言える。リーダー・リスボン「読者志向」と言われるように、テキストが読者を支配するのではなく、読者がテキストを支配するという、これまでとは逆の発想。読者は忌憚なく想像力を発揮し、新たな読みの可能性を追求して行く。読み手のアート、読み方の芸術とも言われる。
- ・1980年代の正典論的アプローチ、物語神学：正典論的アプローチというのは、すでにある正典を、「啓示の乗り物」と理解し、テキスト内の意味を見つめようとする読み方であるのに対し、物語神学とは、聖書を「物語」という文学ジャンルの枠組みで捉え、聖書の「統一性」と「総体性」、また物語の「力」を取り戻そうとする試み。
- ・これらの聖書に対するアプローチは、これまで、リベラリズムが行ってきた歴史批評的な聖書の読み方を退ける。テキストを「あるがまま」に扱うという意味で、福音主義の立場に立つ者の読みにかなり近づいているように見える。しかし、彼らが、「テキストをあるがままに読む」という場合に、もはや、聖書のテキストと歴史の関係理解を、考えに入れていないということに留意しなければならない。つまり、聖書のテキストと、歴史の関連性はもはや問われることなく、ただ、テキストと読者の関係性だけが重視されることとなる。しかし、モダンが聖書を教会から切り離し、ポストモダンが聖書を歴史から切り離してきたのに対して、私達は、聖書を教会に、特に、礼拝と信仰生活に、しっかりと結びつけ続けて行かなければならない。

5. 根本主義 (Fundamentalism) と新福音主義 (Neo-evangelicalism)

- ・1940年代に入り、根本主義陣営のなかに、新たな動きが興る。このグループのなかに、分離主義の傾向が強まり、排他的で反主知主義的傾向が顕われるようになる。「ファンダメンタリスト」という言い方が、徹底的に用いられるようになるのは、この時期から。
- ・そこで、従来の根本主義の在り方と、自由主義陣営の功罪を、出来るだけ正統に評価しながら、新たな選択肢の一つとしての、「新福音主義」(Neo-evangelicalism) という在り方が模索されることになる。
- ・この根本主義と福音主義が、明確に袂を別つことになるのが、1942年に開かれた、全国福音主義同盟であった。
- ・福音主義の立場に立つ神学者らは、これまで、自由主義陣営から批判されてきた、反主知主義的であるという汚名を返上すべく、より高度な聖書学研究を展開して行くことになる。欧米各地に、福音的で、また学術的な神学校が設立されて行った。 →オースティン(08)

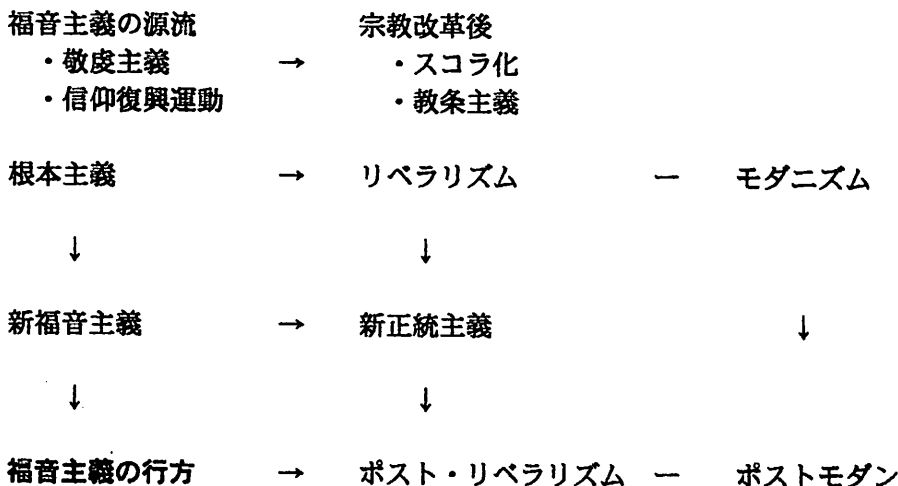
6. 福音主義と同盟教団

- ・同盟教団の創始者であるフレデリック・フランソンの信仰の原点は、欧州の敬虔主義と、欧米で展開した信仰復興運動のうちにあった。
- ・明確な回心の必要性と、信徒の積極的な伝道の奨励。みことばに根差し、みことばに基づき、みことばに生きるという意味での「生きた聖書信仰」と、そこから生み出されてくる「霊性」

- と関わっている。それこそ、かつて初代教会のクリスチャンたちが共有していた精神であり、また、旧約の預言者らのうちに、顕著に覩られる生き方でもあった。
- ・私達の教団は、その創始以来、そういった「聖書信仰」と「霊性」を、霊的遺産として受け継いできた教団であるということを、改めて思われる。
 - ・日本キリスト教会史において、初期のリーダーシップを担った者たちの多くは、自由宗義神学の立場に立っていた。植村正久は、「聖書は一字一句悉く（ことごとく）神の言なりと信ずる者に非ず。」と述べている。小崎弘道は「…聖書に誤謬が有るとかないとかいうが如き窮屈な見解を放擲し、之に向かつては自由研究をなさねばならぬ。又吾人は信仰の基礎を聖書に置くことをせず、聖霊即ち実験に捉えなければならぬ」と。海老名弾正も、「バイブルは参考書として読む」べきという提案をしている。（中村敏『日本における福音派の歴史』）
 - ・フレデリック・フランソンが最初に派遣した宣教師らによる宣教師報告
「日本人は知的で有能な国民であり、科学、工業、商業を開発して、世界において全般的に進歩を遂げつつあると考えられていた。しかし、宗教的には、日本はユニテリアンや自由思想家の影響を受けているので、純粋な福音そのものの説教は非常に重要であることを認めた」（『燃えて耀く光』122頁）
 - ・戦後、日本に遣わされてきた宣教師は、当時の米国の教会事情を反映して、穏健な福音主義の立場に立つ者から、極端な根本主義の立場に立つ者まで、かなり幅があり、温度差もあったという報告が残されている（『協会略史』464～465頁）。しかし、その後の60年の同盟教団の歩みのなかで、神学教育が充実し、日本の教会と教職者が成熟して行くにつれて、福音主義に立つ同盟教団としての整えを頂いてきた。とはいえ、依然として、幅や温度差はある。しかし、今の時代にあって、私達を取り巻く社会と、宗教事情の中で、自らをどう位置づけ、将来をどのように展望して行くのかということが、ますます緊急課題となって行くのではないか。

Ⅳ. 福音主義と現代（モダン・ポストモダン）

福音主義の系譜



1. 教会とモダニズム (modernism)

1) モダニズム

- ・宗教改革以後のキリスト教会が直面したのは、モダニズムの思潮であった。それは、啓蒙主義に基づいた世界観であり、人間理性を重んじ、その「自律した理性」の下に、あらゆる認識の対象を置き、合理的に物事を捉えて行く在り方であり、生き方のこと。そこでは、科学主義、功利主義、相対主義といった価値観が重んじられてきた。この時代精神に対して、適応・適合の態度をとったのが、いわゆるリベラリズムという在り方であったと言われる。
- ・マクグラス『キリスト教の将来と福音主義』
「この新しい取り組み方は、主流のキリスト教を、世俗得主義者に信頼されるものにしたいと望んだ。だがそのその努力は世俗主義を、主流のキリスト者が信頼できるものにしたという結果に終わった。」
「キリスト教の将来にとり、福音主義の最も意義のある貢献は、自由主義者の実験は失敗し、キリスト教の将来は新約聖書に戻り、聖書的キリスト教の魅力を再発見することにあると、他の人々に悟らせることにあろう。」
「今やキリスト教世界の全般に増大する世俗化の脅威に対抗しなければならない。」

2) 事例1：英国の宗教教育

2. 教会とポストモダニズム (Postmodernism)

1) ポストモダニズム

- ・かつてのモダニズムを拒否するか、もしくはそれを乗り越えて行こうとする在り方。かつてモダニズムは、人間理性に立脚することで、当時のあらゆる支配（そこに、教会の監督や指導も含まれる）から開放され、真に自律した個を確立することを使命とした。それに対し、ポストモダニズムは、そのモダニズムが、人間理性なるものを不動の岩とし、その上に構築した世界観は、個の確立を促しながら、実は、個に対し、恣意的で、政治的でもあったと批評する。
- ・つまり、かつて、個をあらゆる支配から解放するために前提とされた理性主義を、今度は、それを、個を支配し抑圧する対象と見做して、そこから脱すること（「脱構築 (déconstruction)」）を志向する運動と言える。
- ・そこから提案される在り方として、理性よりも、感性 (emotion) や直感 (intuition) が重んじられる傾向があります。
- ・かつてモダニズムに観られた、相対主義 (relativism) と多元主義 (pluralism) の傾向が一層強まる。
- ・聖書学においては、これまでの、理性主義に基づいた聖書解釈というのは、恣意的であり、政治的でもある。その理性主義の圧制から、テキストを解放しなければならないと考える。
- ・さらに、「正典」という考え方を、抑圧の構造と位置づけ、外典（かつて、異端として退けられたキリスト教の展開）を復権させようとする動きも観られる。
- ・テキストを歴史から解放し、テキストと読者としての個の関係性だけを重んじ、テキストが読者を支配するのではなく、読者がテキストをあくまで支配しなければならないと考える。

イギリス
John Knox の後
牧師の立場から福音主義を
説く立場の牧師

福音主義のものはよくない
牧師、福音主義を重んじる

そこに、自由で開放的で「創造的な読み」というものが志向されることになる。

- ・ポストリベラリズムから提案されている、「文学批評」「物語神学」「正典論的アプローチ」という聖書解釈学の在り方は、まさに、この時代精神とも関わりがあるように思います。

seeker sensitive

2) 事例2：米国のある教会

30年前くらい
2万人以上

人クリスチャンと好意をもち礼拝
世俗の教会、ドラマ、中高年

エマーズ・パーク

・F・シェーファー『理性からの逃走』

「今日の福音派のクリスチャンのなかにも、その真意を疑えないにしても、現代における信仰伝達の困難さを思うあまり、その隔たりを埋めようとして、不変でなければならないものを変えようとする者がいる。しかし、それをするなら、われわれはもはやキリスト教を伝えるわけにはいかなくなる。われわれのメッセージは、万人の通念とするところとなんら異なるところのないものになってしまうのである。」

・ベバリ・ツィンク＝ソーヤー「純粋に説教され聴かれる御言葉」

「ある説教者たちは、多分、自分たちの行動がもつ神学的・実践的意味を考慮に入れることなく、一般受けするスタイルや技法を採用することにあまりに熱心なのだろう。例えば、説教者の立つ位置が、説教壇の後ろの方から、会衆に接近した場所ないし会衆の真ん中…へと物理的に移動するというのが、今日、説教における共通した慣例である。これは聴き手へと向かうきわめて明白な動きである。こうした動きは一つの理に適った象徴行為と言えるかも知れないが、それはまた、伝統的プロテスタントの礼拝実践にとって規範的となってきたものからの劇的な逸脱を意味する。したがってそれは、意味深長な神学的省察なしには企てられ得ないものである。それには、我々がその間で説教する人たちのための綿密な解釈もさることながら、さらに細心の、祈りを込めた識別力が伴わなければならない。」

月曜

この世の合点でいえること!

V. 終わりに：大祭司の祈り（ヨハネ 17 章）から

「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。それは、わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです」（17：14）

「みなが一つとなるためです」（17：11、21、22、23）

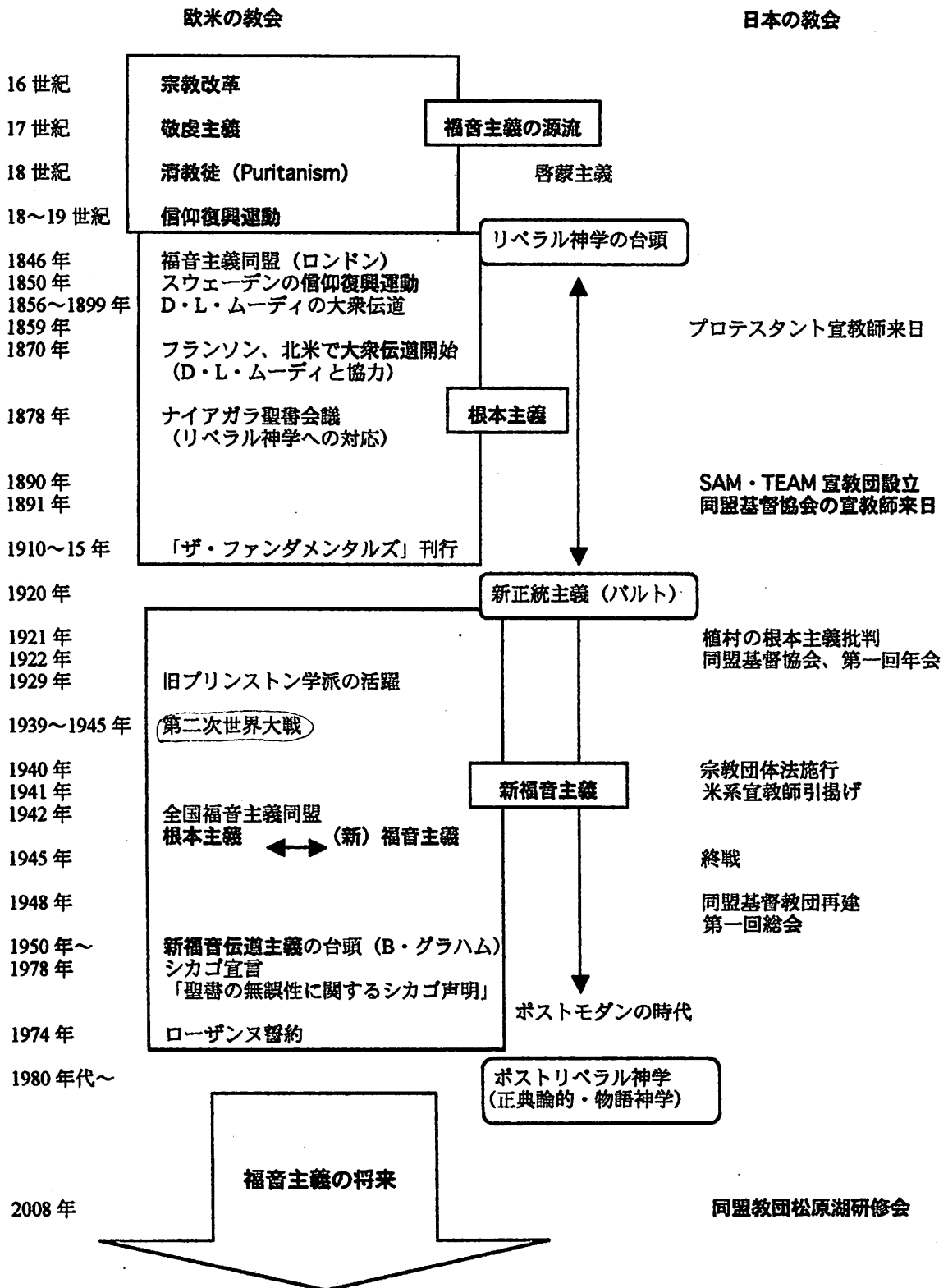
「あなたがわたしを世に遣わされように、わたしも、彼らを世に遣わしました。」（17：18）

「福音主義の将来に何らかの長期的な脅威があるとしたら、それは、霊性に対する注意不足である可能性が高い。徹底して福音主義的な源泉と見解を持つ、霊性の形態を生み出すか、もしくは発見するかしないかぎり、今日の福音派は、明日には元福音派になるだろう。」

（マクグラス『キリスト教の将来と福音主義』）

「ユダヤ人にはユダヤ人のように、律法を持たない人々には、律法を持たない者のように」（1コリ 9：20～21）というパウロの証しは、「私たちは神に認められて福音を委ねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになられる神を喜ばせようとして語る」（1テサ 2：4）という、証しとともに理解されなければならない。

資料：福音主義と日本の宣教



「同盟教団に対する主の御心を求めて」

ていれんじょう 304でとれとある

中谷 美津雄

<序>

あひだ 聖書

392ページ エンゲルローム

- ・中村佳子(旧姓藤井)伝道師のこと(奈良高畑教会史蔵、中村行雄著「母の歩んだ道」)
- ・「福音同盟会」の働きと聖書信仰 (中村敏著「日本における福音派の歴史」)
- ・同盟教団の歴史と信仰規準である聖書信仰
- ・日本同盟基督教団は何であるのか

I. 教団創立 118 年(戦後 60 年)同盟教団は何であるのか

1. 福音主義に立つ同盟教団

・「福音同盟会」の教理規準がその後世界に誕生した福音的な諸教会や諸団体の信仰規準、及び日本最初の二つの教会の信仰規準のモデルである。

(宇田進「現代福音主義神学」第 10 章三「福音同盟会」(Evangelical Alliance)の“九カ条”と日本の教会)

・F・フランソンが 1891 年に設立した「北米スカンジナビア・アライアンス・ミッション」(Scandinavian Alliance Mission of North America)はこの信仰の流れを汲んで聖書信仰に立っている。

・SAM の日瑞同盟基督協会(1904)は、後に日本同盟基督協会と改称(1916)し、高山で最初の日本人年会(1922)が開かれた。その「年会規約」は聖書信仰を明示している。第 4 条「信仰箇条」第二項で「聖書は皆神より黙示されたる神の言にして、…(中略)…聖書は旧新約六十六巻の經典にして協会中決してその權威を疑うものなし」この規約は、リーベンゼラ・ミッションが合併した後(1936)も踏襲されている。

(旧日本同盟基督教団史編纂委員会編「日本同盟基督協会略史」)

・戦時下に、「日本基督教団」第八部に合同したが、敗戦後、宣教師たちの再来日を契機に教団を離脱し、日本同盟基督教団を結成し、1948 年 10 月に再建年会を開いた。(教団史編纂委員会紀要「日本同盟基督教団史研究」第 2 号所蔵 山口陽一「敗戦と教団再建」)

・教憲第 2 条の本教団の信仰告白第 1 項は聖書信仰を鮮明にしている。

「1. 旧新約聖書 66 巻は、すべて神の靈感によって記された誤りのない神のことばであつて、救い主イエス・キリストを顕わし、救いの道を備え、信仰と生活の唯一絶対の規範である。」

2. 機構改革による確認作業

同盟教団は機構改革の作業の最初の部分で、不可変なことを調べ、自己のアイデンティティ確立のために、日本同盟基督教団は何であるのかについて調べ、教団観と理念上の三本柱と教憲・教規上の三原則の 3 つを確認した。

第 1 の教団観の確立のために、教団の歴史を学び、日本同盟基督教団は、「所属教会がそれぞれにキリストのからだでありつつ、同時に、教団全体が教会性を持つ群れ」であることを確認した。教団全体が一つの教会性を持つという自己認識は今後の教団形

成にあって大きな意味を持つことになる。

第2の理念上の3本柱、「第一に聖書信仰、第二に宣教協力、第三に合議制」は、同盟教団が福音主義に立つ教団として形成されてきたことを示している。

第3の教憲・教規上の3原則、「教憲・教規の研究によって、日本同盟基督教団を結び付けてきた」もので、その内容3つある。「第一に、各教会の教会規則は教憲教規に則っていること。第二に、教師の職制の基本的な一致があること。第三に、教団理事会が教会の重要事項に関与していることである。

(2003年度牧師・宣教師・役員 合同研修会記録集)

・アリストター・マグラスの福音主義の6つの特長との比較。

①神についての知識の源泉、キリスト者の生き方の使信としての聖書の最高權威性。

②人となられた神であり、主であり、また罪深い人類の救い主でもあるお方としてのイエス・キリストの尊厳性。

③聖霊の主権性

④個人的回心の必要性。

⑤個人としてのキリスト者、ならびに全体としての教会にとっての、伝道活動の優先性。

⑥霊的養育、交わり、成長のための、キリスト者共同体の重要性。

(「キリスト教の将来と福音主義」第二章「福音主義の特徴」)

これら6つの光を、先に確認された同盟教団の特質に照射すると、聖書信仰、宣教協力という同盟教団形成の理念が浮上する。このことから、同盟教団は16世紀宗教改革以後、世界に広まった福音主義の特徴を継承していると知る。

従って、歴史的にも、理念的にも、同盟教団全体としても、各教会としても福音主義に立つ教団であり、教会であると確信することができます。

II. 同盟教団はどうあるべきか

アリストター・マグラスは前掲書の序論の中で次のように言っています。フランス革命や共産主義革命がそうであったように、「未来を手中にしていると思われた運動が、…歴史の復讐にあって、あえなくちりの中に横たわっている。福音主義も同じ道をたどるのだろうか。…そうなるかもしれない。誰にも分からないことだ。だが、一つだけ言える。福音主義は決して、最近の成功と成果とを、当然のこととするわけにはいかないということである。この運動で重要な役割を担っている人の中に、弱点と自己欺瞞の証拠が見られる。中でも、未来をしっかりと見つめる心構えと、そこに起こりうる事柄に備えた計画が欠けていることは重大である。福音主義は、神のさばきのもとに立たされている。多くのものを与えられた運動として、多くのものを求められているのである。自分たちの起源と土台とに目を向けて、どうしたらさまざまな賜物を、キリスト教会の必要と福音の伝播に結びつけることができるか、絶えず問い続けていかななくてはならない。」

この警告を謙虚に聞き、同盟教団、及び諸教会、諸兄弟姉、私たち一人ひとりに与えられている賜物を、教会の育成と福音宣教進展のために有効に用いられるよう探求しよう。

I. 聖書信仰に立ち、それを深める

1. 指導者の養成

戦後の福音主義の世界的躍進の一因は、「堅固な神学的学識と福音の使信の社会的

カー・い・ハ・セ・リ
ビ・フ・グ・ラ・ス

ロ・ハ・セ・リ・ハ
ビ・フ・グ・ラ・ス

適用への献身に裏打ちされた」指導者たちの活躍にある。(マグラス、前掲書)

学問に関心のない福音派ではなく、知的誠実さも大切にする福音派としての「新福音主義」が戦後アメリカで盛んになり、その訓練を受けた宣教師たちが多く来日し、神学校、各種伝道者養成機関を新設した。(舟喜信「地に住み、誠実を」日本福音同盟編)

また、戦後日本に設立された多くの教会、教団、教派は知的訓練を受けて育った指導者たちによる聖書信仰という共通の土壌で導かれた。1959年、宣教百年記念聖書信仰運動が契機となって、翌年日本プロテスタント聖書信仰同盟(JPC)が設立され、日本の福音派の結束が強められて行くことになった。

このように、聖書信仰に立つ牧師、伝道者の養成は、困難な時代を切り開き、或いは豊かな成長をもたらすために必要不可欠な重要課題である。献身者を産み出す必要がある。教会が若い牧師を望むなら、若い献身者を送り出して欲しい。

神学校を祈りと献金をもって支えることも重要である。神学校と福音主義にたつ諸教会は、明日の教会を背負って立つ献身者を養成するという共通の目的に立って、協力しなければ、明日の神学校もなければ、教会もないと言っても過言ではない。

特に過去の同盟教団との歴史から見て、同盟教団と深い関わりのある神学校である東京基督教学園、聖書宣教会を支援しよう。

ついでに TTS (1994)

クリスチャンの世界観

2. 一人一人がみことばに生きる

福音主義の信仰を突き詰めていけば、神のみことばを信じ、信じるが故に、そのみことばに生きるということになる。現在の福音主義の主な歴史的起源は3つある。16世紀の行政宗教改革と17、18世紀の清教徒運動、及び、ドイツの敬虔主義です。この内の敬虔主義は、信条への受動的同意ではなく、キリストとの「新生した」個人的、親密な関係、「生きた信仰」、霊的な体験を重視し追及するものであった。

F・フランソンの母は北欧の信仰復興運動の影響を受けた熱心な信徒指導者であり、フランソン自身、渡米後、ムーディのリバイバル運動の中で明確な回心を経験し、その運動に献身した人であった。彼のモットーを「横浜宣言」は「キリストとの恒常的、自覚的、親密な交わり」と表現している。そのように、彼は正に敬虔主義の信仰に生きた人、みことばに生かされ、みことばを生きた人であった。

信徒一人ひとりは世俗からただ分離されるだけではなく、むしろ世俗内に遣わされたものとして、主から地の塩、世の光、キリストの証人としての務めを受けています。そのためには、日毎に主との交わりの中、みことばに養われ、みことばに支えられ、みことばに強められて生きる者とならせていただきたい。

フランソニアン

II. 宣教協力を励み進める

同盟教団を一つに束ねてきたもう一つの要因が「宣教協力」である。

1. 国外宣教と国内伝道

同盟教団は国内伝道と国外宣教を車の両輪のようにして伝道に励んできた。同盟教団に国外宣教委員会が設置された1964年頃は、まだ教会数も多くはなかったが、国外宣教を推進しようという一つの宣教のビジョンが同盟教団を一つに束ねる力となった。

「日本とアジアと世界に仕える日本同盟基督教団」と言う標語が、同盟教団のテーマ、或いはモットーのようになっている。恐らくこれは1991年に塩原で開かれた第3回日本伝

道会議のテーマ「日本、アジア、そして世界へ」に由来していると思う。

この伝道会議のテーマについて、舟喜信師は先ほどの本の、「グローバルな時代の世界と日本」の項目の中で、こう書いている。「『日本、アジア、そして世界へ』この標語が意図した目標達成のために、この順序を逆転させて考える必要を感じています。この標語は常識的に考えると、まず私たちの足元を固めて、それからアジアへ、世界へと働きを拡大するということになるでしょう。しかし本当の願いは世界大のビジョンの中で日本、アジア、世界の宣教をと言うことではなかったでしょうか。私は世界大のビジョンの中でこそ、地域宣教は健全に育つと信じています。」

主の宣教命令は「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」(マルコ 16:15)である。国外宣教は、教団から「我らの宣教師」を送り出すことによって、主の世界大のビジョンを具体化してくれた。それによって、自分たちの教会がたとえ小さくても、主の世界大の一つの教会、公同の教会につながっているという、実感を持たせてくれました。その結果、国外宣教は教団の諸教会が健全な成長を遂げるためのチャンスを提供することになった。

同盟教団の新しいビジョン

「『教会形成・アジア21 そして世界へ・・・』

- ・教会形成・・・日本同盟基督教団の国外宣教は、教会形成を目指します。
- ・アジア 21・・・21 世紀にアジア全域へ宣教師を送ります。
- ・そして世界へ・・・アジアの教会と協力して、全世界へ宣教師を派遣し、再臨を待ち望みます。」

この新たなビジョンの達成のために祈りつつ、世界大の教会に仕える幸いを感謝しながら、それぞれが遣わされた地域教会に伝えさせていただきたいと思ひます

Ⅲ. 福音主義に立つ諸教会との協力

JEAを通して、福音派諸教団、諸教会との交わりが与えられていることの恵みは非常に大きい。教団、教派、教会、或いは協力団体がJEAに参加しているか否かで信仰的距離感がつかめる。JEAを通して諸教団、諸教派との幅広い交わりが持てる。一致協力して行動に当たることもできる。

例えば、JEAの5つの委員会を通してなされる活動。青年委員会による、ずっと青山などの青年伝道、社会委員会を通しての自然災害の救済活動、インド・オリッサ州で起こっている迫害に対する抗議や救援のための募金活動等・・・

日本伝道会議を通しての福音派を超えた福音主義諸教会との連携、アイデンティティの確立

プロテスタント 150 周年記念大会の問題・・・どこで線を引くのか→福音信仰

不平等な関係の自由な交流の場
こそが本意

<みことば>

Ⅱテモテ4:1, 2

「神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現われとその御国を思って、私はおごそかに命じます。みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」

神を信じる一歩

Reproduction

(女性教員
牧師夫人
社会局長)

(加入教員)

第1条 本教団は、イエス・キリストを主と仰ぐ公同教会であって、教憲及び教規の定めるところに従って、主の体なる公同教会の機能を発揮し、その存立の使命を達成することをもって本旨とする。

1. 「イエス・キリストを主と仰ぐ公同教会」

公同教会とは、教会のかしらであるイエス・キリストのもとに集められた群れであり、場所、民族を越えて、歴史と世界の全体を包含して存在している一つのキリストの教会を指します。

同盟教団は、その公同教会に属する教会の一団であると理解します。公同教会に属する教会の一団としての同盟教団は、全世界に広がっている普遍的な教会の一部分です。

この普遍的な教会は、みことばと聖霊の恵みのみわざによって、キリストに結び付いているのであって、教会の本質は霊的なものであり、そのすべてはキリストのみが知っておられます。私たちは信仰によってのみ、それを知ることができます。これを「見えない教会」とも言います。

同盟教団の個々の教会は、見える教会として、見えないキリストの普遍的な教会と結び付き、その一部分です。従って、見えない教会と見える教会とは別個ではないということです。

2. 「公同教会の機能を発揮し、その存立の使命を達成する。」

教会の機能の行使については、第2条の教会の項において、「聖書の真理に立ち、礼拝を守り、聖礼典を執行し、戒規を重んじ、すべての造られた者に福音を宣べ伝える。」とあり、見える教会の具体的な在り方を示します。

ここでまず、「聖書の真理に立ち」とありますように、信仰と生活の唯一絶対の基準である聖書に基づいてなされなければなりません。

- 1) 礼拝を守り、
- 2) 聖礼典を執行し、
- 3) 戒規を重んじ、
- 4) 福音を宣べ伝える。

これらの機能については、後の条項で学ぶことにしますが、これらの中に教団として責任をもつ部分と教会として責任をもつ部分とがあります。そのところでその使命が達成されるわけです。

信仰告白

第2条 本教団の信仰告白は、次のとおりである。

1. 旧、新約聖書66巻は、すべて神の靈感によって記された誤りのない神のことばであって、救い主イエス・キリストを顕わし、救いの道を教え、信仰と生活の唯一絶対の規範である。

第2条 「本教団の信仰告白」

同盟教団が公同教会に属する教会の一団であるということは、具体的に何によって知ることができ、何によって表すことができるのでしょうか。これこそ、最も重要なことです。それは、私たちの側からは「信仰告白」によって表します。

真の信仰告白は、旧新約66巻からなる聖書に基づいてなされます。従って、まず、聖書の絶対権威、聖書が誤りのない神のことばであり、信仰と生活との唯一絶対の規範であるとの告白のもとで、三位一体の神、キリストの神人性、唯一の贖い、信仰によってのみ救われる。聖霊によって召し出されたキリストをかしらとする唯一の教会、再び来られるキリストなど、聖書によって示され、また、歴史を貫いて教会が告白し、守り通してきた基本的な信条を受け継ぎ、それを告白してこそ、教会の一団としての教団の真の一致と真の交わりがあります。信仰告白は飾り物ではありません。自覚的にはっきり理解され、教会員の一人一人が「私の信仰告白」として告白し、より深く学ぶ者になりたいものです。その学びのために、「信仰告白解説書」が、教憲教規研究委員会から発行されています。

信仰告白の内容は、原理的には聖書と同等であるべきものですが、神のみことばとしての聖書が、神的起源を持った誤りのない書物であるのに対して、それを告白する人間の口は完全ではありません。ですから、信条は常に聖書によって正されなければなりません。

そこで、あくまでも聖書が基準ですから、私たちの信仰告白の第1は、聖書に関する告白となっています。

この告白という聖書のことばが、「全員の一致によって」という意味を持っていますので、信仰告白は自分の口で告白すると同時に、他のキリストにある者たち一緒に告白するということも意味します。

こうして「聖書信仰」のもとに、教会の一団としての教団が形成されているわけです。

はじめに

新しい年とともに、同盟教団の歴史は、フランソン先生が組織した宣教師によって伝道が開始されてから、七十九年目を迎えたわけです。協会という名で、最初の總會をもったのが大正十一年一〇月ですが、戦後、現在の教団としての形体をもって再出発し、その第一回の總會を開いたのが、昭和三年で、本年は第二〇回目の總會を迎えようとしています。

人でいうなら成人の年です。この年、教団が内外ともに整えられて、主が教団にあたえておられる使命を確認し、その責務をはたすものとならなければなりません。そこで「信仰の立場」と「政治」と「事業」の三つの点から、同盟教団を考えてみようと思います。

第一、信仰の立場

「聖書信仰に立つ教団」

第二、教団の政治

「合議制による教団」

第三、教団の事業

「協力伝道推進の教団」

信仰の立場

教団の真の一致と協力は、単に表面的な寛容性にあるのではなく、信仰的な立場をしつかり持つことによって、動かないものとなります。

もちろん、同盟教団は、何々主義というような特定の教理体系をとるということではなく、旧新約聖書を誤りなき神のことば、信仰と

生活の唯一のよりどころと信じる正しい聖書観のもとに、信仰の純潔を保持するという意味での一致です。

今日まで、同盟教団はこの「聖書信仰」の立場を守り続けてきましたが、これからも、たえず聖書に問われ、正されて、この立場を守り続けなければなりません。今日、聖書の無謬性(むびやうせい)が疑われ、人間の理性がこれに取って代わろうとしている時代に、神のみが最高の権威者であり、聖書においてのみ、神のみ旨を知る

わたしたちの同盟教団

信仰と組織と協力

岡村 又男

立つものに負わされている責任は重大なものがあります。

この「聖書信仰」の立場が、そうでないものとの理論的対立点からのみ、強調されるということではなく、ルター宗教改革が単なる思想上の問題でなく、生ける神の前に引き出された人間としての、深刻な体験から生み出されたように、同盟教団の信仰の立場がひとりひとりによって神の前に告白されるものとならなければなりません。

あつて何をなすべきでしょうか。まず、聖書信仰の確立です。聖書こそ、あらゆる時代を越えて変ることのない神のことばです。そこから、福音の正しい理解、福音の確信にもとずいた伝道、聖書の真理に立った教会形式が可能になります。

さらに秩序と倫理がくずされつつある現代社会の中で、聖書信仰の立場から、社会的責務の遂行を具体化し、真の倫理に立つて戦っていかねばならないと思います。

合議制による教団

同盟教団の性格が問われるとき、教団なのか、連盟なのかよく聞かれます。しかし、わたしは単なる連盟であるとは思いません。憲の第三条によるならば「合議制による教団」であることがはっきりしています。

教会は、本部負担金とか代議員の数とか言った法制的な意味でい

別はあるはずがありません。本質的には各教会は、まったく平等で、同一円周の上に立つ同格のものであると言えます。教会の大小が発言力に違いをよぶようなことがあつては絶対になりません。

「合議制による教団」とは、各教会の主体性を重んじつつ、教団總會を最高の決議機関とすることを行います。したがって、教団總會は、単なる教会連合大会と考えてはなりません。主体性を重んじられてはいる教会から、代議員が選出され、總會をもつわけです。そこには、總會における代議員制の正しい理解が必要です。總會には各教会が主体性をもつて、積極的に議案を提出することがなければならぬはずだと思います。また、「理事会は總會の決議ならびに教団および教規の定める所にしたがって一教務を遂行することが重要であるわけ」です。

教団内で、各教会の主体性を重んじ、その自主性を認めるということは、放任主義ということではないし、各教会の自治にとともに、教団に対する責任をも持つということでもあります。じゅうぶんな合議と總會の決議が尊重されなければなりません。

協力伝道

同盟教団の伝道を考える場合、伝道の姿勢は、開拓者に学ぶところが多くあります。また「聖書信

仰」に立つ限り、いかなる人とも協力して、伝道に当る教団です。しかし今日の「協力伝道」を考えると、教団とミッション、また教団と各教会とのあいまいさが、いつも問われてきたように思えます。そこに、「一国外伝道が叫ばれていながらなかなか具体策が出せないとか、教団レベルでの開拓伝道がなされない弱さが残されてきました。この問題の明確な解決がない限り教団としての伝道事業は、単なる思いつきや、申し合せ程度の弱いものになってしまします。伝道資金においても、教団に余裕があつておこなうのでもなく、また、外国からの援助によっておこなうのでもありません。たとえ少額であっても、各教会の教会員のさきかけ合いによってなされるわけです。

教団の伝道事業とその具体的な展開は、一五六年伝道一によって自主的に整えられていくようですが、今後は残されているあいまいさを解決し、財務面の改革によって、さらに積み上げられていかなければ、真の協力伝道は推進されないのではないのでしょうか。

これらのことは、福音の前進と神の栄光のために、同盟教団の一致と協力の問題です。これを真に実現させてくださるのは、聖霊の働きです。また、わたしたちも、神と共に働く者として、折りつつ聖書と聖霊にみちびかれながら、白からに与えられた責務をはたすものになりたいと思います。